

初期アウグスティヌスとアリストテレス

— ひとつの試論として —

水 落 健 治

1 序

アウグスティヌスがアリストテレスの論理学書（オルガノン）に対して否定的な態度をとっていたことは広く知られている。『告白』 *Confessiones* 4.16.28f. の自伝的記述には、このことが次のように述べられている。

また、およそ二十歳のころ、十のカテゴリーと称するアリストテレスの幾つか書物が手に入り、私はそれを一人で読んで理解しましたが、それが私にとって何の役に立ったでしょうか。…こういうことが私にとって何の役に立ったでしょうか。かえって害になりました。なぜなら、わが神よ、驚嘆すべき程に単純にして不変なあなたをすら、およそ存在するものはすべて、あの十のカテゴリーによって完全に包含されてしまうものと考え、あなたもやはり大きさや美しさの基体となり、あたかも物体におけるようにあなたを基体として、そのうちにあなたの大きさや美しさがあるように理解しようと努めていたのですから。（山田晶訳を一部変更）⁽¹⁾

この箇所によれば、彼がアリストテレスの論理学書に接した経緯とその結果が次のように述べられている。

1. アウグスティヌスは、およそ 20 歳のころ、『十のカテゴリー』 *decem categoriae* (=『カテゴリー論』) と呼ばれるアリストテレスの幾つかの書物 *Aristotelica quaedam* を手に入れた。
2. 彼はそれらを独力で読み理解した。
3. その結果、彼は次のように考えるようになった。
 - (a) およそ存在するものはすべて十のカテゴリー *praedicamenta* によって完全に包含 *omnino comprehendere* される。
 - (b) 神の大きさ *magnitudo* や美しさ *pulchritudo* は、基体 *subiectum* としての神の内にある。
4. このような考え方が、驚嘆すべき程に単純で不変な神 *deus mirabiliter simplex et incommutabilis* を理解する *intellegere* に際しての害になった。

だがその一方で、アウグスティヌスの初期著作に眼を転ずると、そこにはアリストテレスの論理学書に対する肯定的評価とその積極的引用が見出される。

たとえば、彼が回心直後（386-7年）、ミラノのカシキアムで青年たちを教えるために書き始めた論理学の対話篇的教科書の草稿『問答法について』 *De dialectica* では、「同名同義的なもの」 *uniuoca* (*συνώνυμα*)、「同名異義的なもの」

aequiocra (ὁμόνομα) などのアリストテレス『カテゴリー論』に現われる諸概念を基盤に議論が進められているし、また、同時期に執筆された草稿『魂の不死について』*De immortalitate animae* においては、前著『独白』*Soliloquia* で十分論じられなかった「魂の不死」の問題が、「基体」*subiectum*、「実体」*substantia* などを用いたアリストテレス的な枠組で論じられているのである。そこで今回の論稿においては、初期アウグスティヌスにおけるアリストテレスに対する肯定的評価が否定的なものへと変化する過程において、いかなる事態が彼の内に起こったのかについてひとつの試論を提示してみたい。

この試論を思いつくに至った直接の契機は H. ベルクソン『形而上学入門』*Introduction à la métaphysique* の冒頭部分 (*Analyse et Intuition* の箇所) であるが、今回の論稿では、まず、アウグスティヌスがアリストテレス『カテゴリー論』に触れた経緯を、先に一部引用した『告白』4. 16. 28f. から検討し、次いで初期アウグスティヌスのアリストテレス理解を『問答法について』および『魂の不死について』から概観し、その後、初期アウグスティヌスのアリストテレスに対する肯定的評価が否定的なそれへと変化する過程を、『独白』1. 2. 7-1. 5. 11 における神認識に関する議論を中心に見てゆこうと思う。

2 アウグスティヌスのアリストテレス 論理学書との出会い

まずわれわれは、アウグスティヌスがアリストテレス論理学書に触れた経緯について、『告白』4. 16. 28f. のテキストを検討することにする。(以下の訳文は、山田晶訳を一部変更。また、便宜のために本文を文節毎に区分し番号を付加する。)

1. また、およそ二十歳のころ、十のカテゴリーと称するアリストテレスの幾つか書物が手に入り、私はそれを一人で読んで理解しましたが、それが私にとって何の役に立ったでしょうか。
2. 私の師であったカルタゴの修辞学者や、そのほか学者と思われていた人々は、誇りに類をふくらませてそれに言及していたので、私は、それらの名によって心をおどらせ、何か分からない偉大なもの・神聖なものを期待していました。
3. 私は、「たんにことばによる説明のみならず砂上に多くの絵を描いて、極めて学識のある教師たちから教えてもらったが、それでもこの書物は理解が困難であった」と語っていた人々に問い合わせてみましたが、彼らはそれについて、私が独力で読んで知りえた以外のことをなにも告げることができませんでした。
4. この書物は、たとえば人間のような実体や、実体において存在するもの、たとえば人間の形や性質、身長が何フィートあるか、親戚関係、つまり誰の兄弟であるか、どこに位置しているか、いつ生まれたか、立っているかすわっているか、靴をはいているか武装しているか、何かをしているか、それとも何かはたらきをうけているかといったことから、またいま若干の例をあげた九つの類や実体の類のうちにみいだされる無数のことからについて、十分あきらかに論じているように思われました。
5. こういうことが私にとって何の役に立ったのでしょうか。かえって害になりました。なぜなら、わが神よ、驚嘆すべき程に単純にして不変なあなたをすら、およそ存在するものは

すべて、あの十のカテゴリーによって完全に包含されてしまうものと考え、あなたもやはり大きさや美しさの基体となり、あたかも物体におけるようにあなたを基体として、そのうちにあなたの大きさや美しさがあるように理解しようと努めていたのですから⁽²⁾。

以下、このテキストを文節毎に解釈してゆく。

1. まず、アウグスティヌスがアリストテレスの『カテゴリー論』を手に入れたのは、彼が「およそ二十歳のころ」(374年頃)であったと言われている。この時彼は、370年からの三年あまりのカルタゴでの勉学を終えて故郷のタガステに戻り、その秋から文法学 grammatica を教え始めていた⁽³⁾。この前年、彼はキケロの『ホルテンシウス』を読んで真理探求に目覚めたものの、聖書に失望し、マニ教に惹かれ始めている⁽⁴⁾。そして彼は、これを独力で読み理解した。
2. 彼が『カテゴリー論』を読もうと考えた動機は、カルタゴ勉学時代の経験に存していた。すなわち、カルタゴ時代の彼の修辞学の師や学者たちが「誇りに頬をふくらませて『カテゴリー論』に言及していた」ため、彼は、その内容に次第に期待を抱くようになり、それを読みたいとの願望が強くなっていった。
3. 彼が独力でその内容を理解したのち、彼はタガステ在住の知識人たちにその内容を問い合わせさせて conferre みた。彼らは、自分たちが「極めて学識のある教師たち」のもとで『カテゴリー論』を学んだ仕方について、(1)ことばによる説明 loqui, および(2)砂上に多くの絵を描くこと multa in puluere depingere⁽⁵⁾ を挙げ、そのような仕方で教え

られたにもかかわらずその内容を理解することは困難だった uix intellegere, と語った。

4. 『カテゴリー論』は、十個の類 genus について十分明らかに論じている。すなわち、(1)実体 substantia (人間), (2)質 qualitas (人間の形や性質), (3)量 quantitas (身長が何フィートあるか), (4)関係 relatio (親戚関係, つまり誰の兄弟であるか), (5)場所 locus (どこに位置しているか), (6)時間 tempus (いつ生まれたか), (7)位置 positio (立っているかすわっているか), (8)状態 habitus (靴をはいているか武装しているか), (9)能動 actio (何かをしているか), (10)受動 passio (何かはたらきをうけているか)⁽⁶⁾。
5. 彼が『カテゴリー論』を読んだことは、彼が神探求を行うに際しての妨げとなった。彼は、この著作で論じられている十個の類 genus を「およそ存在するもの」quidquid esset についての類である、と存在論的に理解し、「およそ存在するものはすべて、あの十のカテゴリー praedicamentum によって完全に包含されてしまう」と考え、神をもそのような枠組で考えるようになる。この時期以降、彼は唯物論的世界観を採るマニ教に深く関わってゆくことになるが、『カテゴリー論』は、彼のマニ教への道筋を備えたのである⁽⁷⁾。

以上が、『告白』4. 16. 28f. のテキストから導き出されることであるが、われわれは、この中に現れるいくつかの表現に注目し、アウグスティヌスが『カテゴリー論』に触れた状況について、さらに立ち入った考察を試みたい。

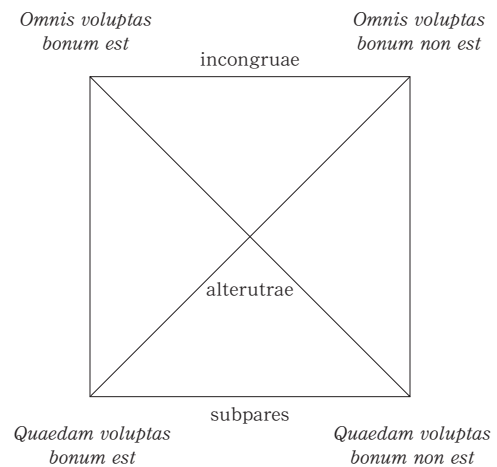
まず、タガステ在住の知識人たちが、「『カテゴリー論』を理解することは困難であった uix intellegisse」と語った点についてであるが、こ

の言葉は、紀元4世紀のアリストテレス論理学書の理解状況をそのまま反映している。『カテゴリー論』については、その難解さが当初から指摘され、多くの註解書が執筆されて来た。6世紀の新プラトン主義者シンプリキオス Simplicios は、『「カテゴリー論」註解』の序文冒頭で同書の解釈史を概観している⁽⁸⁾が、この記述からすると、アウグスティヌスの時代には、すでにペリパトス派のアレクサンドロス Alexandros Aphrodisias (c. 158/171-c. 200) やテミステウス Themistius (c. 337-384/5)、新プラトン派のポルピュリオス Porphyrios (c. 234-301/305) やヤンブリコス Iamblichos (c. 250-c. 330) らがすでに註解を執筆していたことが分かる。したがって、ここでアウグスティヌスが用いている “Aristotelica quaedam” という用語は、この時代すでに、アリストテレスの著作および註解書群がいわゆる “corpus Aristotelicum” として流布していたことを示すのかも知れない。このような状況の中で、新プラトン主義的キリスト教思想家マリウス・ウィクトリヌス Marius Victorinus (c. 350) が『カテゴリー論』をラテン語に翻訳しており、アウグスティヌスは彼の翻訳を読んだものと考えられる⁽⁹⁾。

第二に、タガステ在住の知識人たちが、「たんにことばによる説明のみならず砂上に多くの絵を描いて、極めて学識のある教師たちから教えてもらった」と語った点についてであるが、この言及によって念頭に置かれているもののひとつが、アプレイウス Apuleius (c. 125-17/180) の『命題について』 *Περὶ ἑρμηνείας*⁽¹⁰⁾ であったことは、ほぼ確実と思われる。『黄金の驢馬』なる伝奇的著作で知られる彼は、少年時代のアウグスティヌスが学んだマダウラ出身で、アテナイに赴きプラトン哲学を学んだのち、ローマなどを経てカルタゴに戻り、その地で、ギリシア・ローマの高度な知

的文化を北アフリカの人々にもたらず百科全書的啓蒙家として活躍した。現存する彼の著作、および他の著作家が言及・引用している彼の — 失われた — 著作の名称を見ると、彼が驚くべき博識家であったことが分かる⁽¹¹⁾。

彼の著作『命題について』は、14章からなる小著作で、アリストテレス論理学の定言三段論法の19個の妥当な格式を簡潔に示すことを目標としている。著作は三つの部分に区分され、推論の構成要素たる命題 *propositio* についての記述が行われる第一の部分 (c. 1-4)、四種類の定言命題 (全称肯定命題, 全称否定命題, 特称肯定命題, 特称否定命題) の相互関係が論じられる第二の部分 (c. 5-6)、妥当な定言三段論法の格式が論じられる第三の部分 (c. 7-14) より成り立っている。そして、その第二の部分の中で、四種類の定言命題の相互関係が、おそらくは論理学史上初めて、次のような四辺形によって示されているのである⁽¹²⁾。



したがって、アプレイウスが活躍しアウグスティヌスも学んだカルタゴとその近郊のタガステの町に在住の知識人たちが、アプレイウスのこの図形に何らかの形で接していたことは疑いないことと考えられる。アウグスティヌスに『カテゴリー論』

の内容について尋ねられたタガステの知識人たちは、この図形やその他の図形によって、『カテゴリー論』を含むアリストテレスの論理学を学んでいたのである。アウグスティヌス自身、アプレイウスの『命題について』にも接していた可能性についても、これを否定することはできないであろう⁽¹³⁾。

したがって第三に、彼は、374年頃『カテゴリー論』に接する以前に、『命題論』なども含むそれ以外のアリストテレスの論理学書に——直接・間接に——広く接していた可能性も出てくる。そしてこの可能性は、彼がこの時、タガステの町で文法学 *grammatica* を教え始めたという記述、およびその後、カルタゴで修辞学 *rhetorica* を教えたという記述によってさらに強められる。当時の文法学の教科書の目次を見ると、「定義について」*de definitione*、「類について」*de genere*、「種について」*de specie* などのアリストテレス論理学に繋がる内容が文法学の授業において教えられていたことが分かるし⁽¹⁴⁾、修辞学においては、論争の相手を論駁 *defutare* するために「議論」*argumentatio* の部門で「推論」*rationatio* が教授されていた⁽¹⁵⁾ からである。アウグスティヌスを教えていた修辞学教師が『カテゴリー論』に言及したのは、このような授業においてであろう。また先に言及したマリウス・ウィクトリヌスはポルピュリオス『イサゴージェ』をラテン訳しているが、アウグスティヌスが何らかの仕方でこれに触れていた可能性も否定できない。

このように見てくると、アウグスティヌスがアリストテレスの論理学書に接した状況が明らかになってくる。以下、これまでの考察によって明らかになったことがらをまとめて見ると、それは次のようになるであろう。

1. アリストテレス論理学書およびその内容は、啓蒙家アプレイウスらの努力によって、紀元2世紀には北アフリカのカルタゴおよびその近郊にもたらされていた。
2. この地域の教師や知識人たちは、その難解さに悩みつつも、註解書を読んだり、図形を用いるなどしてその内容を理解しようと努めていた。
3. アウグスティヌスは、カルタゴでの文法学や修辞学の授業において、「定義」*definitio*、「類」*genus*、「種」*species*、「推論」*rationatio* など、何らかの仕方でアリストテレス論理学につながる事項に触れていた。彼を教えていた修辞学教師が『カテゴリー論』に言及したのは、この授業においてと考えられる。そのような中で、彼がアプレイウス『命題について』などを読んだ可能性もある。
4. カルタゴ時代の彼は、アリストテレス論理学の核心ないし全体像をいまだ理解していなかったのかもしれない。しかし教師たちがこれに言及するときの誇りに満ちた表情などから次第にその内容に期待と好奇心を抱くようになった。
5. このような状況で、彼は故郷タガステに戻り、文法学を教え始めた。
6. そのときたまたま、『カテゴリー論』(おそらくはマリウス・ウィクトリヌスによるラテン語訳)の写本が彼の手に入った。
7. そこで彼は、自らこれを読み始め、独力でその内容を理解した。

『告白』4.16.28f. に述べられる「アリストテレス『カテゴリー論』を読み、独力で理解した」という記述は、このような脈絡において初めて正確に理解される。アウグスティヌスにおける『カテ

ゴリー論』との出会いは、それに先立つアリストテレス論理学との直接・間接の接触を念頭に置いて理解されなければならないのである。

3 初期アウグスティヌスとアリストテレス論理学

このように見てくると、アウグスティヌスのアリストテレス論理学との出会いは、一見そう思われるよりも長期的な、大きなできごとであったことが予想されるであろう。そして彼が回心直後に執筆した著作には、この予想を裏書きするように、アリストテレス論理学に対する肯定的評価とその積極的引用が見出される。我々は以下、そのふたつの事例を見てゆくことにしよう。

3.1 『問答法について』 *De dialectica*

3.1.1 『問答法について』と『カテゴリー論』

『問答法について』 *De dialectica* は、回心直後(386-7年)のアウグスティヌスがカシキアクムに同行した青年たちを教えるために書き始めた一連の自由学芸の書の内の一冊である。彼はこれらの書物を執筆した目的を、

私は、受洗準備のためにミラノにいたとき、諸学芸の書物を書こうとしていました。私は、当時生活を共にし、このような学びを毛嫌いしていなかった人々との議論によって、物的なものを媒介として、いわば確実に一步一步昇ってゆきながら、非物的なものにまで到達し、彼らをそこにまで導いて行こうとしていたのです⁽¹⁶⁾。

と述べている。これらの著作の内、完成著作として現存するのは対話篇『音楽について』 *De*

musica のみであるが、現存する『問答法について』は、アウグスティヌスが執筆しようとしていた論理学についての対話篇の未完成の草稿であると考えられる⁽¹⁷⁾。

本書の第1章は次のことばで始まる。

問答法 *dialectica* とは、よく議論することの学である。しかるに、われわれが議論するのは〈ことば〉によってである。この場合、〈ことば〉は単純なものであるか、結合したものであるかのいずれかである⁽¹⁸⁾。

そして、これに続く c.1-4 では、本書の構想が【別表】の形で示される。

ここに掲げられた本書冒頭の一文は、本書の論理学書としての性格を極めて明確に示している。すなわち、冒頭の

問答法とは、よく議論することの学である。

Dialectica est bene disputandi scientia.

という語が、ストア派における問答法 *διαλεκτική* の定義

διαλεκτική δὲ ἐπιστήμη τοῦ εὖ διαλέγεσθαι (SVF III.267)

の逐語的ラテン語訳であるのに対して、これに続く

この場合、〈ことば〉は単純なものであるか、結合したものであるかのいずれかである。

Verba igitur aut simplicia sunt aut coniuncta.

という語は、アリストテレス『カテゴリー論』c.2 冒頭の

語られるものどものうち、あるものは結合によって語られ、あるものは結合なしに語られる。

Τῶν λεγομένου τὰ μὲν κατὰ συμπλοχὴν λέγεται, τὰ δὲ ἄνευ συμπλοκῆς.

を下敷きにしていると考えられるからである。そして、本書の中にはさらに、文法学 grammatica の授業で用いられる素材も極めて多く散りばめられている。アウグスティヌスは本書を、文法学の素材を用いながら、ストアの問答法とアリストテレスの論理学書——特に『カテゴリー論』——とを統合する形で執筆しようとしたのである⁽¹⁹⁾。

3.1.2 『問答法について』c. 8-10 の〈多義性〉論

このように、『問答法について』においてはアリストテレスの論理学書の素材が極めて多く用いられている。われわれは以下、『カテゴリー論』との関係が最も明確な形で現れている〈多義性〉論(c. 8-10)の部分を簡単に見ることにしよう。

De dial. c. 8 の議論は次のように始まる。

かくして、問答法の職務は真理を判別することにあるが、われわれは今、この真理の判別のために、…およそいかなる妨げが産まれて来るのかを見ることにしよう。

すなわち、[〈ことば〉を] 聴く者が〈ことば〉において真理を見ることから妨げられるとき、その妨げは、〈曖昧さ〉であるか〈多義性〉であるかのいずれかである⁽²⁰⁾。

ここでまず Aug. は、問答法の職務である真理の

判別を妨げるもの *impedimentum* (障害物) として〈曖昧さ〉 *obscuritas* と〈多義性〉 *ambiguitas* とを掲げる。そして両者の違いを次のように説明する。

〈多義的なもの〉 *ambiguum* と〈曖昧なもの〉 *obscurum* との違いは次の点にある。すなわち、〈多義的なもの〉においては多くのものが示されるにもかかわらずそれらの何れを受け取るのが望ましいかが分からないのに対して、〈曖昧なもの〉においては注意を向けるべきものが全く、ないしほとんど現れない、という点である⁽²¹⁾。

およそ〈ことば〉 *uerbum* は、それが〈しるし〉 *signum* である限りで何らかの〈もの〉 *res* を意味表示 *significare* している。しかるに、例えば〈ことば〉が不明瞭な発音で発せられた場合などを考えてみると、聞き手はその〈ことば〉を聞いてもいかなる〈もの〉をも思い浮かべることができない。これが〈曖昧なもの〉の場合である。他方、ひとつの〈ことば〉が発せられた場合に、聞き手が複数の〈もの〉を思い浮かべることがある。これが〈多義的なもの〉の場合である。

こうして Aug. は、〈曖昧なもの〉の場合について論じたのち、〈多義性〉の問題に議論を進め、次の実例を語る。ある文法学教師が、明瞭な音声で、'magnus' (大きい) という語を発し、それから沈黙したとする。そして教師の傍らにいる人は、みずからの感覚器官で教師の〈声〉を明瞭に受け止め、その語の意味も知っており、したがってここには〈曖昧さ〉はない。——このような場合であっても、教師の傍らにいる人は、なお不確実性のもとに置かれている。というのも、'magnus' という語は、これに続く語の多様さに応じて多様

な仕方て用いられ、多様な意味をもちうるからである。

1. 'Magnus', quae pars orationis? ('magnus' の品詞はなにか?)
2. 'Magnus', qui sit pes? ('magnus' の韻脚は何か?)
3. Magnus Pompeius quot bella gesserit? (大ポンペイウスはいくつ戦争を行ったのか?)
4. Magnus et paene solus poeta Vergilius? (ウェルギリウスは、偉大にしてほとんどただひとりの詩人だ)
5. Magnus uos erga studia torpor inuasit? (勉学にたいする大きな無気が君たちを踏みにじった)

したがって、教師の傍らにいる人は 'magnus' という語を聴いただけでは、この語のもつ多様な用法・意味のうちのいずれを選びとるべきかを判断することができない。彼は〈多義性〉という多重分岐点の前に立たされるのである。

そして彼はその後、〈多義性〉の類を

1. 語られたもの、および書かれたものにおいて疑いを作り出すもの
2. 書かれたものにおいてのみ疑いを作り出すもの

に区分したのち、第1の類をさらに〈同名同義的なもの〉 uniuoca と〈同名異義的なもの〉 aequiuoca とに区分する。そしてこう語る。

というのも、いかなることであれ何かが語られて、それが複数のものにわたって理解されることが可能である場合、その複数のものは、ひとつの〈ことば〉 uocabulum においてのみならずひとつの〈定義〉 definitio においても把持されることが可能であるか、あるいは共通の〈ことば〉のみによって保たれるものの多様な限定

expeditio によって説明されるかのいずれかだからである。ひとつの〈定義〉が含むことが可能なものは、〈同名同義的なもの〉 'uniuoca' と呼ばれ、一つの名称のもとにあるが多様な仕方て定義づけることしかできないものは〈同名異義的なもの〉 aequiuoca という名称 nomen をもつ⁽²²⁾。

ここに語られる〈同名同義的なもの〉と〈同名異義的なもの〉は、改めて述べるまでもなく、アリストテレス『カテゴリー論』冒頭(1a 1-15)で論じられるものである。

Ὁμόνυμα λέγεται ὄν ὄνομα μόνον κοινόν, ὁ δὲ κατὰ τοῦνομα λόγος τῆς οὐσίας ἕτερος, ...

同名異義的なものといわれるのは、ただそれらの名称だけが共通であって、その名称に対応した実在の定義が異なっているもののことである。

συνώνυμα δὲ λέγεται ὄν τό τε ὄνομα κοινόν καὶ ὁ κατὰ τοῦνομα λόγος τῆς οὐσίας τῆς οὐσίας ὁ αὐτός, ...

同名同義的なものといわれるのは、それらの名称が共通であるとともに、その名称に対応した実在の定義も同じもののことである。

われわれは、ここに引用したアウグスティヌスのテキストとアリストテレスのそれとを比較するとき、アウグスティヌスがアリストテレスのテキストを極めて正確に理解していることを知ることができるであろう。彼は、アリストテレスのテキストに現れる λόγος を definitio と訳すことによって、『カテゴリー論』冒頭の ὁμόνυμα – συνώνυμα の概念を積極的に自らの「問答法」 dialectica の体系の中に組み込んでいるのである。

3.2 『魂の不死について』

De immortalitate animae

このようなアリストテレス論理学書に対する肯定的・積極的評価は、『魂の不死について』*De immortalitate animae* においても見出される。

3.2.1 『魂の不死について』とアリストテレス

『魂の不死について』は、回心直後のアウグスティヌスが、カシキアム滞在後、ミラノに戻って洗礼を受けた後に執筆された著作であり、執筆年代は 387 年春と考えられている。その執筆事情について、彼は次のように語っている。

私は、『独白』*Soliloquia* の後、田園からミラノに戻って魂の不死についての書を書いた。私はこの書を、未完成のまま残した『独白』を完成させるための自らのための覚書にしようと思っていたが、私の意志に反して何らかの仕方で人々の手に渡り、私の小品の中に数えられている。この書は何よりも、推論の歪みと短さのゆえに不明瞭であり、私がそれを読むとき、私自身の集中力を疲弊させてしまい、私自身ですらほとんど理解できない⁽²³⁾。

この記述から分かるように、この書は、カシキアムで執筆された『独白』*Soliloquia* を完成させるための未完成の覚書であり、それが何らかの仕方で人々の手に渡り公開されるに至ったものである。そしてその内容は——アウグスティヌス自身が述べているように——十分な推敲を経たものではなく、議論の断絶などもあって⁽²⁴⁾ 極めて理解困難である。

だがわれわれは、本書が明確なアリストテレスの枠組に基づいて執筆されていることについては、

これを否定することはできないであろう。本書においては、前著『独白』*Soliloquia* で十分論じられなかった「魂の不死」の問題⁽²⁵⁾ が、「基体」*subiectum* (2.2-6.11; 10.17), 「実体」*substantia* (2.2-3.3; 6.11; 8.14; 10.17; 12.19) といったアリストテレス的な用語で論じられるのみならず、「変化」*commutatio* (5.8; 6.11; 7.12; 10.17; 13.20; 13.22; 13.23; 13.24) の概念が「基体とそこにあるものとの関係」という、明確なアリストテレス的脈絡で用いられている。そしてこれらに加えて、「他者を時間において動かすが、自らは動かぬもの」*quiddam quod tempore moueat, nec tamen mutetur* (3.3) という「不動の動者」(*Metaphy.* 1071b3ff.) を想わせる表現なども本書には出現するからである。

3.2.2 『魂の不死について』1.1-2.2

そこでわれわれは以下、『魂の不死について』冒頭の 2 節の議論を概観することにして、『魂の不死について』は、次のように始まる。

もしどこかに学問が存在し、しかも、それが生きかつ恒久に存在しているものの内においてでなければ存在し得ないとすれば、また何か恒久に存在するものを内に宿すものが非恒久的に存在することが不可能だとすれば、学問を内に宿すところのものは、恒久に存在する。…したがって、人間の魂は恒久的に生きる⁽²⁶⁾。

この議論の骨組みは、次のようにまとめられるであろう。

1. A が B の内に存在するとき、A が恒久的に存在するならば B も恒久的に存在する。
2. しかるに、学問 *disciplina* (A) は恒久的

に存在する。

3. ゆえに、学問 (A) を内に宿す人間の魂 (B) も恒久的に存在する。

われわれは、この構造を見るとき、ここでの推論が「基体 *subiectum* とその内にあるもの」というアリストテレス的枠組を前提して行われていることを知ることができる。ここには「基体」という語は用いられていないが、n.2以下の議論を参照するならば、ここに述べられる「学問を内に宿すところのもの」*in quo est disciplina* が「学問の基体」であることは明らかだからである。

n.2では、n.1の議論がさらに次のような仕方で展開される。

理性は、たしかに、魂であるか、あるいは、魂の内にあるかのいずれかである。しかるに、われわれの理性はわれわれの身体よりもすぐれている。すなわち、身体は何らかの実体であり、実体は無よりもすぐれている。したがって、理性は無ではない。

さらに、身体の調和は、それがいかなるものであろうと、基体としての身体の内には不可分離的な仕方で存在していることは必然的である。…しかるに、人間の身体は可変的であり、理性は不変的である。…しかるに、基体の内には不可分離的に存在するものは、その基体に変化するとき、変化しないことは不可能である。したがって、魂は身体の調和ではない。…ゆえに、魂は、それ自体が理性であろうと、理性を自らの内に不可分離的に宿すものであろうと、恒久的に生きる⁽²⁷⁾。

この議論は — アウグスティヌスも述べるように — 極めて理解困難であるが、われわれはここ

に引用したテキストから少なくとも次のことを知ることができるであろう。

ここでアウグスティヌスは、不変的な理性 *ratio* と魂 *animus* との関係を

1. 魂は理性そのものである
2. 魂は理性を自らの内に宿す

というふたつの可能性において捉え、実体 *substantia* および基体 *subiectum* というアリストテレス的概念を援用することによって、魂の不死を論証しようとしている。

このように、『魂の不死について』冒頭 2 節の議論は、

学問 *disciplina* や理性 *ratio* など、恒久的なものを自らの内に不可分離的に宿す基体 *subiectum* は恒久的でなければならない

という考え方を基盤に据えて展開される。この考え方は、その後、5.7f. などにおいて姿を変えて再び現われ、『魂の不死について』を貫く、いわば通奏低音を形作っている。

「基体」と「基体の内にあるもの」との不可分離の関係については、『カテゴリー論』1a 24 ff. において

私が「基体の内にある」と語るのは、あるもの内に、部分としてではなく、それがその内にあるところのものから分離的に存在し得ないものことである。たとえば、特定の文法的知識は基体としての魂の内にある。…そして特定の白は基体としての身体の内にある。…たとえば、知識は基体としての魂の内にある。

— ἐν ὑποκειμένῳ δὲ λέγω ὃ ἐν τινὶ μὴ ὡς μέρος

ὑπάρχον ἀδύνατον χωρὶς εἶναι τοῦ ἐν ᾧ ἐστίν, —
οἷον ἢ τις γραμματικὴ ἐν ὑποκειμένῳ μὲν ἐστὶ τῇ
φυλῇ, ... καὶ τὸ τι λευκὸν ἐν ὑποκειμένῳ μὲν ἐστὶ
τῇ σώματι, ... οἷον ἢ ἐπιστήμη ἐν ὑποκειμένῳ μὲν
ἐστὶ τῇ φυλῇ,

と述べられている。この引用において特に注目し
なければならないのは、「基体」と「基体の内
にあるもの」の実例として魂 *φύξις* と知識 *ἐπιστήμη*
が掲げられているということである。したがって、
アウグスティヌスが魂の不死を論証するにあつて、
この箇所を想起し、これを自らの論証の中に
取り込んだ、ということは明らかであろう。

アウグスティヌスが、「学問 *disciplina* や理性
ratio の恒久性 *sempiternitas*」という概念を受
容したのは、プラトン・プロティノスの源泉から
と考えられる。だが彼は、『魂の不死について』
において、この概念を「実体 *substantia*, 基体
subiectum」というアリストテレス的概念と結合
することによって魂の不死を論証しようとしてい
るのである。

3.3 まとめ — 初期アウグスティヌスにおける 『カテゴリー論』の肯定的受容

以上われわれは、アウグスティヌスが回心直後
に執筆した『問答法について』および『魂の不死
について』の中にアリストテレス論理学書 — 特
に『カテゴリー論』 — の思想が積極的に採り入
れられていることを見た。これらふたつの著作は
いずれも未完成の草稿であるが、このような未完
成の草稿の内にアリストテレスの思想が積極的に
採り入れられているということは、なおさらのこ
と、初期アウグスティヌスがアリストテレス論理
学書の思想を肯定的・積極的に捉えていたことを
示している。

アウグスティヌスがアリストテレス『カテゴリー
論』に初めて接したのは、374年頃である。彼の
回心直後の著作が執筆されたのは、386-7年であ
る。この間の12-3年にわたって、アリストテレ
スの論理学書は、彼にとって肯定的な意義を有し
ていた。『告白』4.16.28f. に述べられている

こういうことが私にとって何の役に立ったでしょ
うか。かえって害になりました。なぜなら、わ
が神よ、驚嘆すべき程に単純にして不変なあな
たをすら、およそ存在するものはすべて、あ
十のカテゴリーによって完全に包含されてしま
うものと考え、云々

という『カテゴリー論』（および、他のアリストテ
レス論理学書）に対する否定的評価は、374年～
386/7年のアウグスティヌスにおいては全くとい
ってよい程現れてはいない。それ所か、初期著作の
中には、彼がアリストテレスの著作に接した際の
「熱狂」*enthusiasm* (G. Watsonの言葉)の残響す
ら見出される⁽²⁸⁾、という評価を下す研究者もいる
ほどである。このような事情を勘案するならば、
アウグスティヌスは10年以上にわたってアリス
トテレス論理学書に熱中していた、とすら考えら
れるのである。

4 アウグスティヌスにおけるアリストテレス 論理学に対する態度の変化

それでは、このようなアウグスティヌスにおけ
るアリストテレス論理学に対する肯定的態度は、
いかなる理由によって否定的なそれへと変化した
のだろうか。『告白』4.16.28f. に述べられる

『カテゴリー論』は神探求の害になった

という評価は、いかなる必然的根拠から生じたのだろうか。われわれは、以下この問題について、H. ベルクソン『形而上学入門』*Introduction à la métaphysique*⁽²⁹⁾の冒頭部分を手がかりとしつつ、『独白』*Soliloquia* 1. 2. 7-1. 5. 11における認識に関する議論を分析することによって考えてみたい。

4.1 分析と直観

— H. ベルクソン『形而上学入門』

H. ベルクソンは、カントの批判哲学が隆盛であった頃に執筆した『形而上学入門』*Introduction à la métaphysique* (1903)⁽³⁰⁾の冒頭において、われわれが対象を認識する際のふたつの方法を区別している⁽³¹⁾。

形而上学についてのもろもろの定義、絶対に関するいろいろな見方を比べ合わせてみて分かることは、…対象を認識するうえに根本から異なった二つの方法を区別している点では一致しているということである。すなわちその方法の一つは、対象の周囲をまわるという意味を含んでおり、他は対象の内部へと入り込むということを意味している。第一の方法はわれわれがとる観点と、表現に用いられる記号とに依存しており、第二の方法は観点というものを考えず、記号に頼らない方法である⁽³²⁾。

このことから、絶対は直観においてしか与えられないと言うことができるが、反対に絶対でないところの他のものは、ことごとく分析の範囲へ入ってくる。直観とは、対象そのものにおいて独自のであり、したがって言葉をもって表現できないものと合一するために、対象者の内部へ自己を移そうとするための共感 *sympathie* を意味している。それと反対に分析とは、対象

を既知の要素、言いかえると他のもろもろの対象とも共通な要素へ還元する操作である。…分析は対象を包み込もうとしながらも、その渴望は永久に満たされずにその対象の周囲をまわらざるをえた運命を負わされている⁽³³⁾。

ここでベルクソンは、われわれが対象を認識する際のふたつの方法を分析 *analyse* と直観 *intuition* と呼び、それらの性格をおよそ次のように区別している。

分析 <i>analyse</i>	直観 <i>intuition</i>
<ul style="list-style-type: none"> • 対象の周囲を回る • 観点に依存 • 記号（言語等）に依存 • 絶対でないものすべてを扱う • 対象を他の対象と共通の要素に分解 • 対象の周囲を回る 	<ul style="list-style-type: none"> • 対象の内部に入り込む • 観点に依存しない • 記号（言語等）に依存しない • 絶対を扱うことができる • 対象内部への共感 • 言語で表現できないものとの合一

そして、この内容を説明するために掲げる幾つかの事例の中で、小説における人物描写の事例を述べる。

さらに、小説のなかの一人物の体験が私に物語られるとしてみる。作者はその人物の性格をいくらかでもくわしく述べ、欲するだけしゃべらせたり働かせたりできるであろう。しかし作者の費すいっさいの言葉も、私が一瞬間その人物自身と会合した場合に経験する、端的な、分解しえない感情と等価なものではないであろう。その人物と実際に会った場合は、動作、態度、言葉のすべては、あたかも源泉からあふれるように、自然のままに流れ出すことが感じられるであろう。それらは、その人物について私の抱いていた観念へつけ加わってきてどこまでもそれ

を豊富にするが、しかし完全にするにはいたらないような、偶有性ではもはやないであろう⁽³⁴⁾。

この説明において特に注目しなければならないのは、アリストテレス論理学を想起させる「偶有性 accidents」⁽³⁵⁾ という語が「分析 analyse」との関連で述べられている、ということである。

われわれが日常言語でひとりの人物を記述する場合のことを考えてみる。そのときわれわれは、その人物（これを仮りに「A」とする）をひとつの実体 substantia と捉え、その基体 subiectum の上に無数の偶有性 accidents を付加して「どこまでもそれを豊富にする」ことができる。

A は背が高い

A は背が高く、鼻が高い

A は背が高く、鼻が高く、痩せている

A は背が高く、鼻が高く、痩せており、美しい声をもっている

A は背が高く、鼻が高く、痩せており、美しい声をもっており、やさしい

∴
∴

そしてベルクソンは、このような記述を際限なく続けても、それは対象の周囲を回るだけのものであり、対象との合一の渴望は永久に満たされない、と語る。アリストテレス的〈実体・基体・偶有性〉の枠組で語られる記述・分析の言語は、「私が一瞬間その人物自身と会合した場合に経験する、端的な、分解しえない感情」を決して伝えはしないのである⁽³⁶⁾。

4.2 認識の様々な形態と神認識

—『独白』1.2.7-1.5.11

アウグスティヌスが、回心直後のアリストテレス論理学に対する肯定的態度から否定的なそれへと自らの思索を展開させて行った背後には、彼が特に新プラトン主義者たちの著作との出会いによって得たことがらを反省し、知識 scientia の様々な在り方についての考察を、ベルクソンが『形而上学入門』で行ったような仕方で行っていったことが存していると考えられる。われわれは以下、その痕跡を、『魂の不死について』とほぼ同時期に執筆された『独白』*Soliloquia* 1.2.7-1.5.11 の中に追ってみることにしよう。

4.2.1 『独白』という書物

『独白』*Soliloquia* は、回心直後のアウグスティヌスがカシキアム滞在中に執筆した「私と理性 ratio との対話」である。彼は『訂正録』1.4.1で著作の執筆事情についてこう語っている。

これらの書物の間に、私は、自らがもっとも知りたいと望んでいたことがらについて理性によって真理を探求しようというみずからの欲求と愛にしたがって、二巻の書物を執筆した。ここでは、私はひとりであるのに、自らに問いかけ自らに答えており、ちょうど理性と私とがいるかのようである。そこから、私はこの著作を『独白』と名付けたが、これは不完全のままである⁽³⁷⁾。

この語から分かるように、ここでアウグスティヌスはまず、「自らがもっとも知りたいと望んでいたことがら」として「神と魂」とを掲げる(1.2.7)。そして様々な知識のあり方の事例を掲げて、自ら

が求める知識の性格を吟味したのち (1.2.7-1.5.11)、神を知る認識主体の側の条件を論じて行く (1.6.12-1.14.26)。そして第二巻では、彼が知りたいと望んでいた第二のことがらである魂の不死の問題が、真理と虚偽についての議論 (2.5.7-2.10.18)、魂が自らの内に有する学問についての議論 (2.11.19-2.11.21)、魂の基体としての性格についての議論 (2.12.22-2.13.24) などによって論じられて行く⁽³⁸⁾。

かくしてわれわれは、『独白』の中に、回心直後のアウグスティヌスの、自発的で深い思索を読み取ることができ、したがって、後のアウグスティヌスの思想の萌芽をも読み取ることができるのである。

4.2.2 『独白』1.2.7-1.5.11における認識の様々な形態の分析

『独白』1.2.7-1.5.11における認識の様々な形態の分析は、アウグスティヌスが理性 ratio の「君は何を知りたいのか」 Quid ergo scire uis? という問いかけに対して、「私は神と魂とを知りたい」 Deum et animam scire cupio と答えるところから始まる。理性は、この答えに対して「ではまず、君は神をどのような仕方であらうか『十分だ』と言えるのか」 Sed prius explica quomodo tibi si demonstretur Deus, possis dicere: Sat est. と尋ね (以上 1.2.7)、その後、様々な認識の仕方が取り上げられて、その認識の仕方が神および魂を認識する仕方としてふさわしいか否かが吟味されて行く。

1. 神を知る知り方 (1.2.7)

探求はまず「ではまず、君は神をどのような仕方であらうか『十分だ』と言えるのか」という問いに答える形で、人間が神を知る際の

知の性格を吟味することから始まる。そして、(1)神を十分に知ったとき、それ以上の神探求は行われなくなる、(2)神を知る知には愛 amor が伴う、ということが結論される。

2. 魂を知る知り方 (1.2.7)

これに続いて、議論は、探求のもうひとつの対象である魂 anima についての知の吟味に移る。まず、(1)魂についての知も愛を伴うことが確認され、(2)その際の対象は理性的な魂 rationales animae であることが示され、(3)一個の人間の内には、理性 ratio とそれを用いる主体 subiectum とがあること、そして(4)この主体が理性を用いる仕方に応じて魂は善くも悪くもなることが示される。

3. 神を知ることと魂を知ること (1.3.8)

前章では、神を知る知と魂を知る知との類似点が「愛を伴う」という点に存することが確認された。そこで次に、両者の相違が論じられる。まず ratio が、「君は友人の魂を知っているような仕方であらうか」と尋ねるが、Aug. はこれに対して「自分は友人を知らないのだから、この間に答えることはできない」と答える。ratio はこれに対して「友人をすら知らない君が、それより認識困難な神を知ろうとすることは恥知らずなことではないか」と主張する。Aug. はこれに対して、天文学の対象である星辰についての知識と今晚の夕食の実例を引合に出し、「認識対象の価値と認識の困難さは比例しない」ことを述べる。

4. 神を知ることと星辰を知ること (1.3.8)

ratio は「星辰を知ること」 (=天文学の知識) が実例として提示されたことを承けて「君は月を知るような仕方であらうか」と問う。Aug. はこの問いに対して「十分

でない」と答える。そして、「自然法則は非物質的な知識であるが、この知識は物質界における星辰の位置によって検証可能であるのに対して、神はかかる自然法則の根拠であり、物質界の現象によって確認できず、われわれはその存在を信じるのみである」ことが確認される。こうして、(1)信 credere の対象としての神に関する知の層、(2)非物質的でありながら何らかの仕方で物体の世界と関係を有する自然法則の知の層、(3)五感で知覚可能な物質界についての感覚認識知の層、という三段階の知の層の存在が明らかにされる。そして、自分が求めている神についての知は、神を信じるのではなく、神を知ることであることが確認される。

5. 魂についての知と感覚認識 (1.3.8)

三段階の知の層の存在が確認されたことを承けて、魂に関する知と感覚認識との関係が吟味される。星辰についての知の場合、非物質的な自然法則に関する知は物質界の現象によって検証可能であるが、非物質的な魂は感覚認識の対象とは無関係であるので、魂の認識には知性 intellectus が必要であることが確認される。

6. 真なることを知っていることと真なることを語ること (1.4.9)

次に ratio は、「では君は、プラトンやプロティノスが神について知っているような仕方で神を知れば十分か」と尋ねる。Aug. はこれに答える形で、(1)ある人が語っていることが真である、ということと、(2)その人がそのことがらを知っている、ということとは別であることを確認する。

7. 幾何学の知について (1.4.9-1.5.11)

最後に、幾何学の知が問題にされる。まず

アカデメイア派の懐疑論およびストア派の知識論との関係で幾何学の知の確実性が論じられたのち、(1)複数の幾何学上の知識の間に確実性の差はないこと、(2)幾何学の知について考察するためには感覚 sensus を捨てなければならないこと、(3)神についての知はかかる幾何学の知とも異なっているよう思えること、が確認される。

4.2.3 『独白』とアリストテレス論理学

以上の記述は、回心直後のアウグスティヌスにおいてすでに、知の性格についての吟味が始まっていたことを示している。われわれは、これらの記述の中に(1)感覚認識 sentire, 知性認識 intellegere, 信 credere という認識の三形態の区別、(2)認識主体としての感覚 sensus と知性 intellectus との区別、(3)自然法則や魂についての知における非物質的知識と感覚的知識との関係、(4)知識と言語との関係、といった、後のアウグスティヌスにおいて主題化される様々な事項が萌芽の形で現われていることを知るのである。

だがその一方、この『独白』1.2.7-1.5.11 のこの箇所においては、実体 substantia と基体 subiectum の枠組を基盤とするアリストテレス的知識の問題ははまだ明確な形では論じられていない。たとえば、

- 感覚認識・知性認識・信という認識の三形態とアリストテレス的知識との関係
- 神認識、魂についての認識とアリストテレス的知識との関係
- 神認識や魂についての認識に伴う愛 amor とアリストテレス的知識との関係

といった問題は、いまだ俎上に載せられてはいないのである。回心直後のアウグスティヌスは、一方で、『独白』第1巻におけるような知の様々な

形態に関する吟味・分析を行っている。そして他方で、アリストテレス論理学（特に『カテゴリー論』）に基礎を置いた『問答法について』や『魂の不死について』を執筆している。だが両者の関係は、いまだ自覚的に吟味されてはいないのである。

5 まとめ

したがって、われわれはかかる事実を踏まえて次のように結論することができるであろう。

アウグスティヌスにおけるアリストテレス論理学に対する否定的評価は、回心後の認識に関する様々な吟味の中で徐々に形成されていった。

われわれはこの過程を、その後のアウグスティヌスの著作——『教師』*De magistro* など——の中に追うことができると考える。だが、この考察については別の機会に譲らなければならない。

【付記】『告白』*Confessiones* 4.16.28f.

の記述の歴史性について

われわれは、本論考において、『告白』*Confessiones* 4.16.28f. を手掛かりとしつつ、『問答法について』、『魂の不死について』、『独白』という初期著作を中心に初期アウグスティヌスとアリストテレス論理学との関係を考察してきた。ここから明らかになったことがらを踏まえて、『告白』4.16.28f. の記述の歴史性について付記しておく。

『告白』*Confessiones* 4.16.28f. によれば、彼が20歳のとき『カテゴリー論』を読んだことは、彼が神探求を行うに際しての妨げとなったと語られている。彼は、十個のカテゴリーの枠組を神にまで適用したために神を物的に考えるようにな

り、このことが彼のマニ教への道筋を備えた、というのである。

したがって、この記述に従うならば、彼の回心への道程は次の枠組で捉えられることになる。

1. およそ20歳の時『カテゴリー論』を読む
2. その結果、神を物的なものと考えるようになる
3. 物的神観を採るマニ教に耽溺する
4. プラトン派の著作（プロティノスなど）によって非物的存在者の世界を知る
5. 神を非物的なものと考えるようになる
6. 回心

そして回心時のアウグスティヌスは、すでに新プラトン派の著作によって、アリストテレス『カテゴリー論』を読んだ結果引き起こされた物的神観を克服していたのであるから、アリストテレスの論理学書に対する否定的評価をすでに下しているものでなければならないことになる。

しかるに、回心直後に執筆された『問答法について』や『魂の不死について』の存在は、回心後のアウグスティヌスにおいてアリストテレス論理学書がなお肯定的に捉えられていたことを示している。

この事実からすると、『告白』4.16.28f. の記述をそのまま歴史的事実と考えることはできなくなる。われわれは、アウグスティヌスが『告白』において自らの生の軌跡を新プラトン主義の枠組にあてはめて記述した、と考えるべきであろう。

注

- (1) *Conf.* 4.16.28f. *Et quid mihi proderat, quod annos natus ferme uiginti, cum in manus meas uenissent Aristotelica quaedam, quas appel-*

lant decem categorias ... legi eas solus et intellexi? ... Quid hoc mihi proderat, quando et oberat, cum etiam te, deus meus, mirabiliter simplicem atque incommutabilem, illis decem praedicamentis putans quidquid esset omnino comprehensum, sic intellegere conarer, quasi et tu subiectus esses magnitudini tuae aut pulchritudini, ut illa essent in te quasi in subiecto sicut in corpore, ...

(2) *Conf.* 4.16.28f. 1. Et quid mihi proderat, quod annos natus ferme uiginti, cum in manus meas uenissent Aristotelica quaedam, quas appellant decem categorias ... legi eas solus et intellexi?

2. quarum nomine, cum eas rhetor Carthaginensis, magister meus, buccis typho crepantibus commemoraret et alii qui docti habebantur, tamquam in nescio quid magnum et diuinum suspensus inhiabam

3. Quas cum contulisset cum eis, qui se dicebant uix eas magistris eruditissimis non loquentibus tantum, sed multa in puluere depingentibus intellexisse, nihil inde aliud mihi dicere potuerunt, quam ego solus apud me ipsum legens cognoueram;

4. et satis aperte mihi uidebantur loquentes de substantiis, sicuti est homo, et quae in illis essent, sicuti est figura hominis, qualis sit et statura, quot pedum sit, et cognatio, cuius frater sit, aut ubi sit constitutus aut quando natus, aut stet aut sedeat, aut calciatus uel armatus sit aut aliquid faciat aut patiatur aliquid, et quaecumque in his nouem generibus, quorum exempli gratia quaedam posui, uel in ipso substantiae genere innumerabilia reperiuntur.

5. Quid hoc mihi proderat, quando et oberat, cum etiam te, deus meus, mirabiliter simplicem atque incommutabilem, illis decem praedicamentis putans quidquid esset omnino comprehensum, sic intellegere conarer, quasi et tu subiectus esses magnitudini tuae aut pulchritudini, ut illa essent in te quasi in subiecto sicut in corpore, ...

(3) *Conf.* 4.4.7. Possidius, *Vita Augustini* 1.2 Nam et grammaticam prius in sua ciuitate et rhetoricam in Africae capite Carthagine postea docuit, ...

(4) *Conf.* 3.4.7-3.6.10.

(5) ここに「砂」と訳した puluis は、幾何学の図形を描くために用いられた粉末を意味する。当時の幾何学や論理学の教育は、薄い箱などに砂などの粉末を敷き、そこに図を描くことによって行われたのであろう。

(6) cf. *Œuvres de Saint Augustin 13, Les Confessions, Livres I-VII*, Institut d'Études Augustiniennes, Paris 1998, p. 455, n.1. なお、ここに掲げられているラテン語は、substantia 以外筆者の推定である。彼が読んだラテン訳 (Marius Victorinus の翻訳だったと考えられる) が現在失われているため、確実なことは分からない。

(7) 「あたかも物体におけるように」 sicut in corpore という表現に注目のこと。 *Op. cit.*, p. 88.

(8) Simplicius, *On Aristotle's Categories 1-4* tr. by M. Chase, Cornell U.P. 2003, pp. 17ff.

(9) *op. cit.*, p. 87, n. 1.

(10) 邦訳は、『新プラトン主義研究』第5号, 新プラトン主義協会, 2006年, pp. 65-89 掲載の拙訳を参照。

(11) アプレイウスの人となりについては、水落健治「アプレイウスと『命題について』」『新プラトン主義研究』第5号, 新プラトン主義協会, 2006年, pp. 91-103 を参照。

(12) この図が後代の筆耕者の挿入でないことについては、水落健治「アプレイウスにおけるアリストテレス論理学とストア論理学」『新プラトン主義研究』第5号, 新プラトン主義協会, 2006年, p. 53 を参照。

(13) アウグスティヌスが、ほとんど同郷者ともいうべきアプレイウスの著作を熟知していたことについては、たとえば、*De civ. Dei* における *De deo Socratis* の引用 (20回), *De magia* の引用 (1回), *De mundo* の引用 (1回) などから分かる。また、アプレイウスの生涯に関する情報は、アプレイウスが自らの著作の中で述べていることがらを別とすると、そのほとんどがアウグスティヌスに由来するものである。cf. S. J. Harrison *Apuleius, A Latin Sophist*, Oxford U.P. 2000, p. 1. また、J. Pépin は、Aug. がゲラサのニコマコスの『算術入門』*Intr. arith.* をアプレイウスの翻訳によって知っていた可能性を指摘している。Saint Augustine, *Soliloquies and Imortality of the Soul* tr. G. Watson, 1999, p. 202.

また、回心直後 (386-7年) のアウグスティヌスのカシキアクムでの生活に同行したリケンティウスの証言によれば、アウグスティヌス自身も、

- カシキアムで図形を用いて自由学芸（論理学ないし天文学）を教えたという。水落健治「カシキアムでの自由学芸」『パトリスティカ — 教父研究』第11号，新生社，2007年，pp.45-51。
- (14) e.g. F. S. Charisius, *Ars Grammatica* l.Vの目次 (G.L., I, p.2) を参照。なお，当時の文法学の授業はかなり典型的であったので，Aug. もこのような内容を学んだことはほぼ疑い得ないと考えられる。
- (15) vgl. H. Lausberg, *Hanbuch der literarischen Rhetorik*, S. 197-201.
- (16) *Retr.* 1.6 Per idem tempus, quo Meidiolani fui baptismum percepturus, etiam disciplinarum libros conatus sum scribere interrogans eos, qui mecum erant atque ab huiusmodi studiis non abhorrebant, per corporalis cupiens ad incorporalia quibusdam quasi passibus certis uel peruenire uel ducere.
- (17) この結論が導き出されるまでには，19世紀末以来の長い研究史があるが，これについて言及は，今回は省略する。
- (18) *De dial.* 1 Dialectica est bene disputandi scientia. Disputamus autem utique uerbis. Verba igitur aut simplicia sunt aut coniuncta.
- (19) J. Pépin, *St. Augustin et Dialectique*, 1976, pp. 62-98 は，*De dial.* に見られるこれら3つの源泉についての詳細な考察を行っている。
- (20) *De dial.* c.8 Itaque nunc propter ueritatem diiudicandam, quod dialectica profitetur, ..., quae impedimenta nascantur, uideamus. Impedit enim auditorem ad ueritatem uidendam in uerbis aut obscuritas aut ambiguitas.
- (21) *De dial.* c.8 Inter ambiguum et obscurum hoc interest, quod in ambiguo plura se ostendunt, quorum quid accipiendum sit ignoratur, in obscuro autem nihil aut parum quod attendatur apparet.
- (22) *De dial.* c.9, Nam quidquid dicitur et per plura intellegi potest, eadem scilicet plura aut non solum uocabulo uno sed una etiam definitione contineri queunt aut tantum communi tenentur uocabulo sed diuersis expeditionibus explicantur. Ea quae una definitio potest includere 'uniuoca' nominantur, illis autem quae sub uno nomine necesse est diuerse definiri 'aequiuocis' nomen est.
- (23) *Retr.* 1.5 Post libros Soliloquiorum iam de agre Mediolanum reuersus, scripsi librum de immortalitate animae. Quod mihi quasi comonitorium esse uolueram propter Soliloquia terminanda, quae imperfecta remanserant, sed nescio quomodo me inuito exiit in manus hominum et inter mea opuscula nominatur. Qui primo ratiocinationum controtione atque breuitate sic obscurus est, ut fatiget, cum legitur, etiam intentionem meam uixque intelligatur a me ipso.
- (24) C. W. Wolfskeel, *DE IMMORTALITATE ANIMAE OF AUGUSTIN, Text, translation and commentary* B. R. Grüner, 1977, p.1 は，c.1-10の議論とc.11の議論，およびc.12以下の議論の不連続性を指摘している。
- (25) 具体的には，*Sol.* 2.22-23の議論。cf. *Op. cit.*, pp.192f.
- (26) *De imm.anim.* 1.1 Si alicubi est disciplina, nec esse nisi in eo quod uiuit potest, et semper est, neque quidquam in quo quid semper est potest esse non semper, semper uiuit in quo est disciplina. ... Semper igitur animus humanus uiuit.
- (27) *De imm.anim.* 2 Ratio profecto aut animus est aut in animo. Melior autem ratio nostra quam corpus nostrum: est corpus nonnulla substantia est, et melius est esse substantiam quam nihil. Non est igitur ratio nihil. Rursus, quaecumque harmonia corporis est, in subiecto corpore sit necesse est inseparabiliter, ... Mutabile est autem corpus humanum et immutabilis ratio. ... Nullo modo autem potest mutato subiecto, id quod in eo est inseparabiliter non mutari. Non est igitur harmonia corporis animus. ... Semper ergo animus uiuit, siue ipse ratio sit, siue ipse ratio sit, siue in eo ratio inseparabiliter.
- (28) Saint Augustine, *Soliloquies and Imortality of the Soul* tr. G. Watson, 1999, p.192. He (sc. Augustine) retained his enthusiasm for logic, and it was partly this enthusiasm to which Julian of Eclanum was referring when he called Augustine sarcastically "Aristotle Poenorum", "the Aristotle of the Africans" (*C. Iu. imp.* 3. 199).
- (29) 以下，『形而上学入門』の本文としては，Henri Bergson, *Oeuvres*, Presses Universitaires de France, 1959 (6^e édition: 2001), pp.1392-1432を用いる。なお，邦訳として，バルクソン『形而

- 上學入門』(坂田徳男訳「世界の名著」53, pp. 65-108)を参照した。
- (30) *Op. cit.*, p. 1392, n. 1.
- (31) 以下, 引用訳文は, 坂田訳を一部変更して使用。
- (32) *Op. cit.*, p. 1392. Si l'on compare entre elles les définitions de la métaphysique et les conceptions de l'absolu, on s'aperçoit que les philosophes s'accordent, ..., à distinguer deux manières profondément différentes de connaître une chose. La première implique qu'on tourne autour de cette chose; la seconde, qu'on entre en elle. La première dépend du point de vue où l'on se place et des symboles par lesquels on s'exprime. La seconde ne se prend d'aucun point de vue et ne s'appuie sur aucun symbole.
- (33) *Op. cit.* p. 1395. Il suit de là qu'un absolu ne saurait être donné que dans une *intuition*, tandis que tout le reste relève de l'*analyse*. Nous appelons ici intuition la *sympathie* par laquelle on se transporte à l'intérieur d'un objet pour coïncider avec ce qu'il a d'unique et par conséquent d'inexprimable. Au contraire, l'analyse est l'opération qui ramène l'objet à des éléments déjà connus, Dans son désir éternellement inassouvi d'embrasser l'objet autour du quel elle est condamnée à tourner, ...
- (34) *Op. cit.* p. 1394. Soit encore un personnage de roman dont on me raconte les aventures. Le romancier pourra multiplier les traits de caractère, faire parler et agir son héros autant qu'il lui plaira: tout cela ne vaudra pas le sentiment simple et indivisible que j'éprouverais si je coïncidais un instant avec le personnage lui-même. Alors, comme de la source, me paraîtraient couler naturellement les actions, les gestes et les paroles. Ce ne seraient plus là des accidents s'ajoutant à l'idée que je me faisais du personnage, enrichissant toujours et toujours cette idée sans arriver à la compléter jamais.
- (35) この語は, 坂田訳では「偶然の到来物」と訳されている。しかしわれわれは, この語をアリストテレス論理学の脈絡で理解する方が自然であると考ええる。
- (36) ベルクソンがこのような思索に立ち至ったのは, 彼の新プラトン主義との接触によるのかも知れない。この点については, 田中敏彦「プロティノスとベルクソン」水地宗明監修『新プラトン主義の原型と水脈』2000年, pp. 293-306を参照。
- (37) *Retr.* 1.4.1 Inter haec scripsi etiam duo uolumina secundum studium meum et amore, ratione indagandae ueritatis de his rebus, quas maxime scire cupiebam, me interrogans mihi respondeo, tanquam duo essemus ratio et ego, cum solus essem. Unde hoc opus Soliloquia nominavi; sed imperfectum remansit,
- (38) ここからわれわれは, 『魂の不死について』が Sol. 2.12.22の議論を承けて執筆されたことを知ることができる。

【別表】

『問答法について』 *De dialectica* の構想

- 序論 1. 問答法の定義 (c.1)
 2. 〈単純なことば〉と〈結合したことば〉 (c.1)
 3. 句と文, 文と命題 (c.2)
 4. 単純な命題と結合した命題 (c.3)
 5. 問答法の区分 (c.4)
- I. 単純なことばについて (問答法の素材) ……………語ることにについて de loquendo
1. 〈ことば〉とは何か, 〈ことば〉の四つの構成要素 (c.5)
 2. 第一の構成要素—(狭義の) 〈ことば〉 uerbum
 (a) 〈ことば〉の起源 origo (c.6)
 (b) 〈ことば〉の力 uis (c.7~10)
 i. 〈ことば〉の力とは何か (c.7)
 ii. 〈ことば〉の力に由来する真理の識別の妨げ
 A. 曖昧さ obscuritas (c.8)
 B. 多義性 ambiguitas (c.9~10)
 α. 語られたものに関する多義性 (c.9~10)
 β. 書かれたものに関する多義性 (c.10)
 (c) 〈ことば〉の活用 declinatio
 (d) 〈ことば〉の配置 dispositio
3. 第二の構成要素—〈語られうるもの〉 dicibile
 4. 第三の構成要素—〈発語〉 dictio
 5. 第四の構成要素—〈もの〉 res
- II. 結合したことばについて (問答法の課題)
1. 文をなさないもの (いわゆる「句」など)
 2. 文をなすもの
 (a) 命題でない文 (命令文など) ……………言明することについて de loquendo
 (b) 命題の真偽……………表明することについて de proloquendo
 (c) 推論の真偽……………表明の結論について de proloquiorum summa